

がん細胞 中から放射線治療

新年度に保険適用へ

がん細胞の中で核反応を起こして細胞を壊す、新たな放射線治療「ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）」の装置の製造販売が19日、厚生労働省の部会で了承された。手術や従来の放射線治療が難しかった頭頸部のがん患者の選択肢が増えると期待されている。

BNCTに必要な薬剤も26日に同省の部会で承認が議論される。対象は手術で取ることができず、転移していない耳下腺がんなどの頭頸部がん。機器は3月中に承認され、新年度に保険が適用される見通し。

増殖の激しいがん細胞に集まるよう、アミノ酸につけたホウ素の薬剤を患者に点滴。がん細胞に取り込まれたとこ

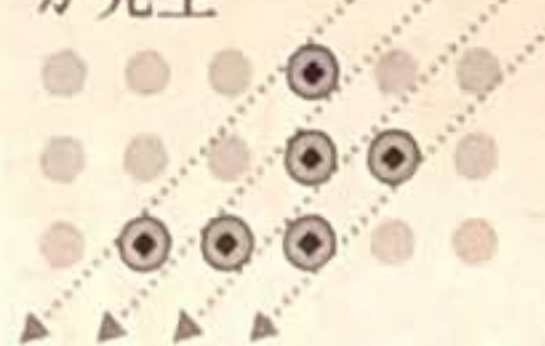
手術難しい頭頸部 新たな選択肢

ホウ素中性子捕捉療法のイメージ

- 1 ホウ素の薬を点滴
- 2 がん細胞にホウ素が取り込まれる



- 3 中性子を照射。核反応を起こして粒子線が発生



- 4 ホウ素を取り込んだがん細胞が壊される



るで、外から弱い中性子を当てると、ホウ素が細胞の中で核反応を起こし、発生する放射線（粒子線）が、がん細胞のDNAを壊す。放射線は、細胞一つ分の距離しか飛ばないため、ホウ素が取り込まれたがん細胞をピンポイントで壊すことができるという。

治療できるのは、皮膚から深さ約6センチ以内のがん。照射は1回で済む。再発するなど治療の難しい頭頸部がんの21人にによる治験では、治療90日後にがんが消えたり小さくなっていたりする「奏効率」は71%と報告されている。副作用は、照射した場所の脱毛や粘膜炎などがみられた。国立がん研究センター中央病院放射線治療科の伊丹純科長は「BNCTは日本発の技術。副作用も少なく患者の生活の質を保ちながら治療ができる」と話している。

（月館彩子、富田洗平）